
箱庭の調律者

ラヴィエンテ改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭の調律者

【Nコード】

N6955X

【作者名】

ラヴィエンテ改

【あらすじ】

通り魔によって殺された主人公。

彼はどのような人生をおくることになるのか。開発したスキルを引っさげ、今、箱庭に調律者が降り立つ。

更新は不定期の上処女作です。生暖かい目で見守ってやってください。

第零話 終わりと始まり(前書き)

初投稿です。よろしくお願ひします。

第零話 終わりと始まり

「人生つてさ、本当あっけなくて、つまらない。

自己紹介が遅れたね。俺は首里道人^{しゅりみちと}。某K大学に今年から入学するはずだった十八歳。

なんで「はずだった」になってるのかというと、前の方の文でわかると思うが、殺されたんだ。

ん？文？何言ってるんだろ俺。

いやまさか今日日本中を騒がせてる凶悪通り魔事件の被害者になるなんて思わなかった。

背後からいきなり刃物を突き立てられて殺されるって聞いてたけど、本当だったんだなあ……

血を失うにつれて段々五感が失われていく……

あの感覚は二度と経験したくないなマジで。思い出すだけでトラウマになりそうだ。

まあそんな事（オイ）は置いていて

「どうなってるんだこれ？」

そう、俺はわけのわからない真っ白な空間にいる。

なんか頭がおかしくなりそうだな……

これが永久に続くのか!?

え?死後の世界ってこんなの!?花畑とか想像してたのに!?いやこの空間あと一日ぐらいいたら絶対発狂する。

「いやここ時間の概念ないし、本当のあの世ってわけじゃないからな。」

ああそうか。安心した……って

「誰だよ!?!」

後ろを振り向いてみたが誰もいない。まさかもう発狂して幻聴が聞こえるようになったのか?

「違う!上だよ上!」

上を見ると、ジーンズにポロシャツとラフな格好のダンディーなおっさんが降りてきた。

「一体あんた誰だよ。」

「神さ。」

「まあ死後の世界があるんだし今更神が居ても驚かないけど、何で唯の人が死んだくらいで出張ってくるんだ?」

「それは僕の部下のミスで間接的に君を殺してしまったからさ。」

うわあよく読んでた二次創作のテンプレだ。マジであっただんな…
…ん？間接的？どついう事だ？

「部下はあの殺人鬼…生前は切り裂きジャックと呼ばれていた男
を人間に転生させてしまったんだ。本当はミミズにするはずだった
のに。」

あゝなるほど。死因に関わってたわけか。しかし超有名人に殺され
た事になるな。

「そんな風に考えたのは君が始めてだ。」

神が何やら驚いているようだ。

うん。今更だけど心を読まれている事に関して突っ込むべきか？

……やめとこつ。めんどくさい

「彼に殺された人はここに連れてきて転生してもらつことにした。」

はい更にテンプレの重ねがけです。本当にありがとつございました。

「ちなみに二次元の世界に行ってもらつけど…後空いてるところ
が一つしかない。」

「どこですか？」

「めだかボックスという漫画さ。」

比較的平和そうだし、いいか。

「因みに原作ブレイク大いにやっちゃって構わないよ。」

へえー

「因みに特典は七つね。」

「自分で考えたスキルとかでもいいですか？」

「度を越さなければね。」

「じゃあ一つ目は俺の存在を元の世界から消すこと。二つ目は家族が幸せに暮らせるようにすること。」

「珍しい若者だね。」

親兄弟には俺のことを忘れて平穩に過ごしてほしいからな。

「後四つだよ。」

「三つ目は主人公の同級生として十三組に入れること。四つ目は高1の年齢からスタートさせること。五つ目は性別を変えないこと。」

赤ちゃんプレイや女体化なんてまっぴらごめんだ。

「四つ目と五つ目に関しては心配しなくてもいいから残り四つだよ。」

「じゃあーーーーーっていう感じのスキル下さい。」

「本当欲がないね。チートはこれでやっと一つだよ。」

「後エアギアのレガリアを発明できるようにしてください。それとDグレのティキの能力をお願いします。」

「後一つ。」

「主人公と同じくらいの身体能力と脳。」

「これで全部かな？」

「はい。」

「じゃあ転生させるよ。」

神が俺の額に指で触れると凄まじい眠気に襲われた。

神の「第二の人生を楽しんでね」という声を聞きながら、俺は意識を失った。

第零話 終わりと始まり（後書き）

主人公のスキルは次回の設定で書かれます。
タイトルから推理してみてください。

主人公設定（前書き）

もう見てくれた人がいることに感動です。

前回ミスがありました。申し訳ありません……

主人公設定ですが、Dグレネタ多いです、

主人公設定

主人公設定

名前：首里道人

身長：173cm

体重：55kg

外見：エアギアの皇枢を男にした感じ。瞳の色は赤。一（いわゆるアルビノ体質）

年齢：生前は18歳 転生後は16歳

性別：男

異常

？「超律」（チューンナップ）

対象に取った相手のあらゆる調子を最盛期レベルまで引き上げるスキル。異常を対象にすれば、かけられた相手は120%自分の異常を使いこなせる。

過負荷に使う際には更にマイナスにするかプラスに転ばせるか選べる。

プラスにされたマイナスは元々の作用とは逆に働くことになる

例）致死武器スカーレットが他人の生傷を古傷に変えるスキルに変わるなど

また、このスキルの影響で、道人は一度「調律」した相手のスキルの構造を知り、完璧に使いこなすことができる。

？
ゲットオアスロウ
取捨洗択

Dグレのテイキの能力に名前をつけた物。あらゆるものに対して触れるか触れないかを選択できる。使い方によっては相手を殺害することも可能な危険極まりないスキル。

例) 壁に触れることを「拒絶」してすり抜ける、相手が「生きていること」を拒絶するなど。

備考：フラスコ計画に参加しており、「十四番目」と呼ばれることが多い。

験体名「神ノ道化」(クラウン クラウン)

交友関係が極端に狭く、十三組の十三人でも知る人は研究を統括している名瀬くらいである。
サーティンパーティー

他の知り合いはフラスコ計画関連で黒神真黒、日之影空洞、後は昼寝仲間である太刀洗斬子程度。

基本的に自分に興味があることが無ければ最下層のさらに下にある「十四番目の秘密の部屋」にいる。一(部屋に入るには正しいスパコンに特定のデータが入ったメモリを読み込まなければならず、そのメモリは日之影、真黒の二人しか持っていない。

少ない知り合いは大事にする。
実はツンデレ。

主人公設定（後書き）

こんな駄文を読んで下さってありがとうございます。ごさいました。
ではまた次回までさようなら。

第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅（前書き）

三話連続投稿です。

第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅

首里 side

目を覚ますと、どこかわからない公園のベンチの上だった。

「『知らない天井だ』っていうお約束出来ないじゃん……」

ぶつぶつ言いながら体を起こすと、染めて隠していたはずの白髪がふわりと顔にかかる。カラーコンタクトも消えてしまったようだ。高かったのに……

「ま、この世界ならこのままでいいか。」

そこまで考えて手で取ってを掴んでいたバッグが目が付いた。

開けてみると受験票と完成品の玉璽レガリアとiPhoneと通帳（0が十個ほど並んでいる）が入っていた。

iPhoneを開くとメールが一通来ていた。

「えっと……『無事転生できたようで何より。玉璽レガリアは僕からのサービスさ。使いこなせる様にしておいたから反動とかは無いはずだよ。これを見たら不知火袴の所に面接に行つてね。このアドレスは返信も可能だから、やりとりもできるよ。』……便利だな。返信は後にして袴さんの所に行くか。」

すぐそこに箱庭学園があったので、受験票を見せて通してもらつ。地図で理事長室の場所を確認したというのに、たどり着くまで十分以上歩き続けた。

「はあ、はあ……やっと着いたか。どんだけ広いんだ……失礼します。面接を受けることになっていた首里道人です。」

「ああ、どうぞ。」

入ると腹黒いことを考えてそうな老人が「今失礼なことを考えませんでしたか？」……この人、出来る。

「まさか。そんなわけないでしょう。それより、理事長に呼ばれるということは……何か問題があったってことですよな？」

「いやいやまさか。君に問題などありませんよ。ただ、少し老人の実験につきあっていただけだと思います。」

袴総帥はグラスに入ったサイコロを取り出した。

「このサイコロを振ってもらえ、結構です。自分が異常であることは自覚していますし、コントロールにしています。」……そのアブノーマルを見せてもらえますか？」

「いいですよ。でも……」

俺は立ち上がりカーテンの所まで歩いていく。

「そこで隠れてコソコソしてる方々にはご退場願いましうかねえ！ 『拒絶』 x 7！」

衝撃音が響きわたり、隠れていた十三組の十三人は空気の塊を受け
サーティンパーティ
て一人残らず失神した。

「全く、盗み聞きなんて趣味の悪い……」

袴総帥に向き直る。

「話を戻しましょうか。」

結構いい笑顔で言っただけ

首里 side out

袴 side

十三組の十三人を全員同時に気絶させた！？

サーティンパーティ

一体どのような異常なのです？

「私の異常は『超律』（チューンナップ）と『取捨洗択』（ゲットオアスロウ）の二つです。『超律』（チューンナップ）は対象者の異常、体調などを絶好調に調整できる異常です。例えば――」

そして私の首のあたりに触れる。すると、みるみる肩こりが治っていった。

「『取捨洗択』（ゲットオアスロウ）は、触れる物を選択できる異常です。さっきのはそれを応用して衝撃波を飛ばしたんです。壁をすり抜けたりもできますよ。」

「……素晴らしい。是非フランスコ計画の中枢である十三組の十三人サーティンパーティに参加してください。」

「構わないですが、いくつか条件があります。まず私がパーティーに参加することは統括者以外には他言無用でお願いします。あ、統括者さんにも口止めしておいてくださいね？二つ目はこのセキュリティシステムを吞んでください。」

渡された書類には色々なシステムが書かれていた。後部屋の要望が。

「わかりました。全て吞みましよう。」

「感謝します。十三組に合格したということでもいいんですね？」

「はい。」

「では失礼。」

そう言うと彼は出て行きました

いやはや。とんでもない拾い物をしましたね。
フラスコ計画は大きく躍進するでしょう。

袴 s i d e o u t

首里 s i d e

どうしてこうなった……

今俺は真黒さん（へんたい）に彼の妹、即ちめだかの魅力について延々と講釈を受けている。

「……でね！その時のめだかちゃんの可愛さといったら言葉にでき

ないほで……」

もう一度言おう。どうしてこうなった。

多分めだかの写真を見てにやにやしていた真黒さんにぶつかってしまっただからだろう。

しかし本当妹LOVEな人だな……

名瀬を気絶させたことがばれたらどんな目に遭うか、想像しただけで寒気がする。

それから延々二時間妹講義をきかされ、俺はすっかり弱ってしまっただ。

「おい真黒。その辺にしとけ。そいつも困っているだろ。」

振り返ると見上げるような大男が立っていた。

日之影会長！あんたサイコーだよ！

「……分かったよ。」

不服そうながら引き下がってくれた。

「ありがとうございます。俺は首里道人といいます。先程箱庭学園への入学が決まりました。」

「面接の帰りだったのか。何組だ？あ、俺は日之影空洞。生徒会長をやってる。」

「十三組です。」

「俺たちもだ。」

「そうなんですか。っと。時間だ。じゃあこれで。」

「ああ。入学おめでとう。」

「ありがとうございます。」

会長に背を向け、歩き出す。

「いい人だったな。忘れるのはもったくない。よし……」

俺は『日之影空洞を忘れること』を『拒絶』してからあてがってもらった寮の部屋に向かった。

第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅（後書き）

次回はいよいよ入学式です。

- 十三組編まで主人公は介入しません。なので飛ばすかもしれない。
ん。ではまた次回

第二箱 チート二人との邂逅（前書き）

性懲りもなく投稿です。
原作キャラと邂逅します。

第二箱 チート二人との邂逅

首里 side

『世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？安心しろ。それでも、生きることは劇的だ！』

『そんなわけで、本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ。学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩みごとがあれば迷わず自安箱に投書するがよい』

『24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける！！』

……このセリフ生で聴くとこんなに迫力あるんだ……

どうも、風の玉璽レガリアを使おうとしたら地面に頭から墜落した首里道人です。

いやちゃんと飛べたんで調子に乗ったら着地に失敗してしまったんだよ。

かなり痛かった……

で、

今生徒総会の真っ最中です。

キン クリ ゾンて便利だね！

いやしかしこの喧嘩売ってるとしか思えないセリフを堂々と言える事に対して尊敬の意を示したい。

相当非常識だよ。

容姿もそうだけど。素晴らしく美人だね。真黒さんが自慢するのもわかる。なんとなく。

この数週間の間、箱庭に入り浸ってたから真黒さんや日之影会長と仲良くなった。後太刀洗選挙管理委員会委員長とも。

オススメの昼寝スポット教えていただいてありがとうございます。理事長が一（正確には名瀬先輩が）三日で時計台地下十四階を作ってくれたため、今はそこに住み着いている。いくらなんでも仕事早くね？

他のメンバーにはばれないよう、光を透過して幽霊のようにふよふよ浮かびながら部屋まで下っている。

もちろん拒絶の扉は華麗にスルーしている。

名瀬先輩に早くかつこっそり仕上げてやったんだから対価をよこせと言われたので、エアトレックを一組作ってあげたら結構興奮してた。

分解して鬼気迫るように構造調べてたからな……

閑話休題。

さて、演説も終わったようだし巢に帰ろう。

体育館の天井から飛び降りる。

十三組の所に座らなかったのは目立ちたくなかったからだ。

風の玉璽レガリア使って天井まで登ってゆったり見物してたってわけ。

さすがにあの生徒会長も発見できなかったはずー

「おい待て貴様」

「うわあああっ！？」

ばれてたの！？どんだけ目がいいんだよ！てかちゃんと演説に集中しろよ！

「貴様の髪は目立つからな。後演説中に見つけたわけではない。」

地の文につっこむなよ！

「それで何の用です？黒神めだか生徒会長？」

「そのローラブレードは何だ？」

「これはA・Tエアトレックー俺の発明品ですよ。」

嘘です。俺が考えたんじゃないです。

「どんな機械だ？」

「空を飛べる靴とを考えてください。」

「興味深いな。」

「用事はそれだけですか？なら俺も帰りますよ。」

「うむ。引き止めて悪かった。しかし今度から総会の時は自分の席に座れ。」

「善処します。それじゃ失礼」

いや〜ばれるとは思わなかったわ。やっぱり超人だな。オーラからして違うし。

さっさと帰って寝るか。

で、

「何故に教室？」

寝た瞬間例の天然チート女がいる教室にいた。

「今何か失礼な事考えなかったかい？」

「まさか。それよりあんた誰です？」

「おっと、自己紹介がまだだったね。僕は安心院なじみ。僕の事は親しみを込めて安心院さんあんしんいんと呼びなさい。」

「命令口調ですか。で、その安心院さんが何の用です？」

「それは君が欲しいからさ。」

「欲しいのは俺じゃなくて俺のスキルでしょ。」

「ばれてたか。そうだよ。君の異常アブノーマルチューンナップ『超律』は素晴らしい異常だよ。

「

「あげませんからね。」

「僕のスキルと交換する気は？」

「ないです。」

「そうか。もう行っていいよ。」

「諦めがいいんですね。」

「馬鹿言っちゃいけない。諦めないよ。何度でもアタックするぞ。」

「……デスヨネー。」

「ふふっ。」

「じゃあさようなら。あまり会いたくないですが。」

「冷たいことを言わないでくれよ。」

そのセリフをバツクに教室から出た。

第二箱 チート二人との邂逅（後書き）

marucco様感想ありがとうございます。

PV2000、ユニーク400以上と今日始めたばかりだということに嬉しい限りです。

さて、ここでアンケートを取りたいと思います。

時計台地下の視察のとき、

? ラスボスとして出す

? 静観させる

どちらか選んで感想と一緒に投稿していただきたいと思います。

読んで下さってありがとうございます。
感想をお待ちしています。

第三箱 風紀委員会との殺り合い（前書き）

PV3000アクセス、ユニーク500突破です！

maruco様、投票と感想、ありがとうございます。
主人公無双です。

第三箱 風紀委員会との殺り合い

首里 side

「おい一年。校舎の中で何てもんはいていやがる。校則違反だぜ？
ケケッ！」

……厄介なやつとエンカウントしちゃった。

今俺、雲仙冥利に絡まれてます。

校舎をぶらつこうと思って珍しく外出したのだが、その時うっかり
石の玉璽レガリアをはいてきてしまったのである。

そこを雲仙に見つかり、今に至る。

「とにかくちょっと来てもらおうかなあ？拒否権はないぜ。」

「……わかりました。」

周りが同情するような目で見ってくる。そんなに嫌われてんのか風紀
委員会。

ま、やられるつもりなんて全くないけど

はいていたのが石でよかった。

暫く歩くと教室に着いた。

中には武器を持った風紀委員の人がぎっしり。

「ま、今回は初犯で……全治半年で勘弁してやるよ！やれ！お前ら！」

各々の得物で攻撃してくる。

でも、全て無駄だ。

首里 side out

side 3人称

風紀委員の攻撃はー全て道人の体をすり抜けた。

『なっ！？』

そしてすり抜けた先には当然仲間がいるわけで

「ぐあっ！」

「ぎゃあー！」

「げふっ！」

必然的に同士討ちになる。

「デメエ……何をしゃがった！」

「俺のスキルを使っただけさ。」

「！！異常アブノーマルだったのか！？」

「ご名答。さてこの人たちには行動不能になってもらいますかね。」

道人は緋翠ジエ・ロードの道を発動し、次々と風紀委員を『石』にしていく。

「さて、これで邪魔は入りませんね。」

「っつ、舐めんな！」

雲仙はスーパーボールの弾幕を見舞うが

「こんなオモチャで俺を倒せるとでも？」

道人は全て掴み取ってしまった。

雲仙も多少焦り始めた。

「（クソ……部下がいるから『灰かぶり（シンデレラ）』は使えねえ……こうなりや『鋼髪アリアドネの糸』を使う！）」

投げられた鋼髪アリアドネの糸はネット上に展開し、接近してくる道人を阻む――予定だった。

道人は雲仙の想像の斜め上をいった。

自らネットに突っ込み、その後急ブレーキを掛けて糸が緩んだ瞬間隙間からジャンプで脱出したのである。

そして彼の蹴りは雲仙の腹に直撃し、そのまま『石』に変えた。

首里 side

「やっと終わった……」

まさかあれが成功するとは思わなかった。

あれは生前見た『エア・ギア』で

南樹が鶴に対して使用していたのを真似たものだ。

「く……そ……」

うわあ凄い形相。

「悪く思わないでくださいよ雲仙先輩。貴方達に正義を執行するだけの力量が無かったのが悪いんです。まあ、この世に正義なんざ存在しませんけど。」

「……なんだと？」

とあるダークヒーロー異能漫画の敵役のセリフを借りよう。

「『この世に正義など存在しない。悪^{クズ}の中で最強の者が正義と呼ばれているだけだ』……俺の持論です。」

教室を後にする。

生徒会と風紀委員会が全面衝突する二週間前の出来事だった。

第三箱 風紀委員会との殺り合い（後書き）

アンケートもよろしくお願いします。

第四箱 本格的な介入前のささやかなデモンストレーション（前書き）

すみません！本当すみません！

・十三組まで介入させないと言っておきながら……
今回から主人公が前書きに出てきます。

首「この見通し大甘なダメ作者が！そんなだからテストも悪いんだろ！」

作「仕方ないだろ気が変わったんだ。あ、蒼井宗仁様、maruc
o様、感想ありがとうございます！」

首「こんな作者の駄文を見ていただいている皆様には感謝してもしきれないです。」

作「扱いひどくね!？」

首「それでは本編をお楽しみください！」

作「無視かよ……」

第四箱 本格的な介入前のささやかなデモンストレーション

首里 side

「……………暇だ。」

どうも、最近風紀委員会を蹴散らした首里道人です。

風紀委員会が敗北したことはどこからか漏れたらしく、生徒の間ではやり過ぎを見かねた学園が送った刺客の仕業だとか、風紀委員会が粛清してきた生徒の怨念が形になったものにやられたとか言われているらしい。

前者はともかく後者はどこのオカルトだよ！

……………なんにせよ、風紀委員会の格は多少落ちたらしい。

そういえば蹴散らしたメンバーの中には鬼瀬、呼子なんかは混ぜてなかった。

生徒会に関わるからかな？

……………考えるネタすら尽きた。

うん、寝よう。そつだ。それがいい。

時計塔の屋上でも行ってみようかな？

安心院さんが出てきませんように。

首里 side out

人吉 side

放課後、生徒会室に向かおうとしていた俺に、不知火が話しかけてきた。

「善吉いゝ、今箱庭で噂になってる風紀委員会振り返り討ち事件でどう思っつゝ?」

「何だそれ?」

「ええゝ知らないのゝ!?今かなり噂になってるのに!？」

「教えるよ不知火。」

「教えてください、だろ?」

「……教えてください!」

「よろしい」

……こんなやりとり少し前にもあったよな、確か。

「えゝとね、2週間ぐらい前に校舎の中で改造革靴履いてた奴を雲仙委員長が他の委員と一緒にどっかの教室に引っ張りこんで肅清しようとして振り返り討ちにあつたつて。保健委員の人が言うには、全員筋肉がガチガチに硬直して『石』みたいになつてたらしいよ」

「はあ！？何だそのオカルト！そいつがメデューサだったとでも！？」

「そいつ髪が白くて目も赤かったって！風紀委員会に肅清された人たちの怨念だつて説もあるよ あひゃひゃ！」

「ますますオカルトじゃねえか！つと、俺もう行くわ。」

「情報料として今度なんか奢ってね」

「わかったよ。」

俺は生徒会室へと急いだ。

善吉 side out

めだか side

私は今生徒会室で善吉を待っているのだから……遅いな。

「悪いめだかちゃん。遅れた！」

丁度来たようだな。

「遅いぞ善吉！たるんでいるのではないか？」

「だから悪かったって！」

「阿久根書記も喜界島会計もとっくに来ているぞ！まあとにかく仕事を始めてくれ。」

「わかった。」

めだか side out

三人称 side

「そついやめだかちゃん。」

「ん？」

「十三組に髪が白くて目が赤い奴いないか？そいつ風紀委員会を返り討ちにしたらしいんだけど。」

「……会ったことはある。確かローラーブレードを履いていたな。
A・T（^{エテ}トレック）という空を飛ぶための発明らしい。」

「『ローラーブレードで空を飛ぶう！！？？』」

「ち、ちょっと待ってください。そんなことできるんですか？」

「推測だが4kW程の出力はあった。ちなみに平均的な原付バイクが3 - 5kWの出力だ。」

「何でももの作ってるの……」

「カツ！、それが十三組ってことなんだろうさ。」

首里 side

「ハクション！うう、誰かが俺の噂してるな……おかげで目が覚め
ちまったよ。……ん？」

携帯をチェックするとメールが来ていた。神からだ。

『暫くぶりだね。楽しんでるか？』

一応伝えておく。風紀委員会と生徒会が争うのは今日だ。』

なん…だと!？

やばい！急がないと！

轟の玉璽レガリアを使って全力疾走する。

二、三分で生徒会室の窓の外に着いた。
中の会話が聞こえてくる。

「やめてくだ」

本当ギリギリだ！

何も考えず窓を蹴破って中に侵入した。

首里 side out

善吉 side

風紀委員長の雲仙が来て、火薬玉をばら撒きやがった！

「……やめてくだ「遅えよボケ」

爆発による爆風が届いて気を失う瞬間、白い何かが俺たちの前に立ちはだかるのが見えた気がした。

善吉 side out

首里 side

ふゝ危ない。原作介入のチャンスを逃すところだった。

俺がさつき何をしたのかというと

?窓を蹴破り割って侵入

?善吉、阿久根、喜界島を後ろにかばう

?轟の玉璽レガリアでこちらにきた爆風を吸収して一丁あがり

「貴様はあの時の……」

「間に合ってよかったですよ生徒会長。ではさようなら。」

「待て！せめて名前をな」自分で探してください。それじゃあ。」

窓から飛び降りて逃げた。

わざと生徒証を落として。

第四箱 本格的な介入前のささやかなデモンストレーション（後書き）

アンケート、感想ともに入れていただけると作者はのたうちまわってよろこびます。

それではまた次回。

第五箱 新しい力と計画の破綻（前書き）

短いです！クオリティも低いです！

後PV20000アクセス、ユニーク30000人突破です！

首「今回はひでえ目に合わせやがって！食らえ！Trick Cr
ystal Sand Wind」

作「待て！止めて！それは流石にシャレにならん……ギャアアア
ッ！」

「作者は挽肉に成りました」

第五箱 新しい力と計画の破綻

首里 side

「え？」

ただいま俺、絶賛困惑中。

あの後屋上で昼寝してたらいつかの真っ白な空間にいた。何を言っ
て（ry

うん、何コレ？

ちくせう、俺が何をしたっていうんだ！何か！？校舎の崩落に巻き
込まれて死んだとかそんなパターンか！？そこはご都合主義がくる
もんだろ！？

「いや違うから！君まだ死んでないから！」

「ナイスツツコミ神様。それで俺をここに招いたわけは？」

「いや最高神に君の転成に関する書類提出したら『こちらのミスで
殺しておきながら特典がこれだけか！申し訳ないと思ってるなら少

なくともあと三つは着けよ!』って怒られてね。」

「俺は今の特典で十分なんですけど……」

「あと三つは渡さないとランク下げると最高神から言われてるんだよ。だからなんでもいいから特典取って。いや選んでくださいお願いします。」

そついうと神は見事なスライディング土下座を決めた。

「ちょ、頭上げてください!分かりました、選ばせていただきますから!」

「よかった……で、何にする?」

悩むなあ……

「じゃあ重力子の体と同じ様に作り変えてください。」

「重力子の能力もだよね?」

「はい。目十輝トウインクルファイもお願いします。」

「後は?」

「俺の向こうの出生について

- ・黒神グループが極秘で行っていた実験の生き残り
- ・生き残りは俺のみ。後は全員『廃棄』された。

っていう設定にしといてください。」

「了解した。」

「後『エア・ギア』『めだかボックス』の原作知識の随時更新をお願いできますか？」

「了解したよ。それじゃ、良い人生を。」

そして俺の視界は暗転した。

目を覚ますと青空が広がっていた。

「戻れたみたいだな……そろそろ決着着いたかな？」

『他人からの認識』を拒絶して階下に降りる。

「やめろめだかちゃん。やり過ぎだ。」

あの名シーンキター！

(*主人公は多少テンションがおかしくなっています)

めだかボックスの中でも屈指の名シーンを生で見れるとは、首里さん感激だよ！

そうやってしみじみしていると、いつのまにか雲仙の勧誘のところで終わっていた。

「ちょ、めだかさんとどちらへ!？」

「病院に決まっておろう。からだがボロボロだからな……と言いたところなのだ。」

え!？

俺の方向いてる!？

しまった気付かれた!

「あそこのあやつを捕獲して事情を聞かないとな!」

こうなったらA・Tの全力疾走で逃げる!

後ろを向いて走り出す俺。

「待て!」

ちょっと!

こっちはA・T履いてんのにめだかさんグイグイ追いついてくるんだけど!

何なのあの生徒会長!？

「捕まえたあ！」

「あべしっ!?!」

……盛大にこけた。

「さあ、色々と話してもらおうか。」

ズルズルと引きずられていく俺

「不幸だあああああ！」

俺の叫び声が校舎にこだました。

第五箱 新しい力と計画の破綻（後書き）

首「作者は前書きで挽肉に成った（した）んで今回は俺が……。ア
ンケート、感想よろしくお願いします。」

第六箱 策略と魔改造計画の開始（前書き）

前回にもまして短いです。

首「リンム様、ぎくる様、感想ありがとうございます！」

第六箱 策略と魔改造計画の開始

首里side

おはこんにちわ。ただいま、生徒会長に拉致られている首里道人D
eath。

善吉ちゃん達が怪しいものを見る目で見てくるよ……

ひどくね？俺仮にも命の恩人なんだけど。

認識を拒絶して『知られざる英雄』状態だったはずなのに何で気付
かれたんだろう？

「周囲の僅かな変化を見切ったまでだ。」

地の文に二回も突っ込むなよ！

というかなにそれこわい。

……あれ？

最初から昔日之影さんを調律した時に入手した『知られざる英雄』
使えばよかったんじゃない？

俺ってバカなの？抜けてるの？

……悲しくなってきた。考えるのはやめよう。

それよりこの状況をどう乗り切るかだよな……

ここで情が移つたらフラスコ計画視察の時本気でやり合えなくなる
かもしれない。それはそれでいいのだが、俺は重力子のチートボデーケラレティチルドレンを持ってるので、今のままでは勝負にすらならない。

……レガリア玉璽渡してあそこでA・Tの特訓させるか？

先生もいるし、あそこで得た感覚は現実にフィードバックするし。

うん、決定。

「ちよつと待つてくださいい会長さん。全部話すんで俺の寮の部屋まで来てもらえませんか？」

「……よし、分かった。」

「ちよ、めだかちゃん！？こんな怪しいやつの部屋に行く気か！？」

心が折れそうだよ！

「無論貴様らも来るのだぞ？拒否権はない。」

「……えええ！？」

いじけて罪悪感を煽ってみるかな……（悪い笑み）

「ただ窓の外から侵入して爆風を防いであげただけなのになにその
反応……」

「「「はあ!?!」」」

またハモってるし。

「本当の事だぞ?」

「別に気まぐれだったし感謝なんて求めないけど敵意を向けられるのは流石に嫌ですね。」

「い、いや悪かった。」

善吉ちゃん慌てふためいてる……面白え(悪笑)

で、

ウチに着きました。

生徒会メンバーがソファでそわそわしてる。(黒神以外)

紅茶でも出しとくか。

「それで聞きたい事って?」

紅茶を並べながら聞く。

「まず貴様の名前からだ。」

「首里道人。一年。」

「良い名だな。では首里同級生、なぜ私達を助けた?」

「空中散歩中にたまたま目に入ったから。」

「それが例の発明品てやつのか？」

善吉ちゃんの質問。

「その通り……っっても誰も聞いてないか。」

全員寝てるしね。紅茶に混ぜた睡眠薬で。

「よっと。重いな。」

一気に抱え上げ、パソコンのある部屋まで移動する。

俺のパソコンには六つほど電極付きのヘルメットがくっついている。

そのうち四つに生徒会役員達の頭を入れ、パソコンのメモリの殆どを占めるあるプログラムを立ち上げる。

さて、俺も入りますか。

都市型プログラム、『ロン・ホーツ・ボーン・街』^{ガイ}に。

第六箱 策略と魔改造計画の開始（後書き）

アンケートと感想を下さい！お願いします！

第七箱 調律と気苦労（前書き）

作「一週間も空けてしまい、すみませんでした！実力試験だったんです！」

首「全然出来なくて半泣きだったくせに。」

作「俺が悪いんじゃないやい！あんなレベルに設定する学校側がおかしいんだい！」

首「開き直りやがった！」

作「とにかく今日から再開です！marucco様、紅シルク様、ぼるてつかー様、感想ありがとうございました。」

首「反省しろや！」

第七箱 調律と気苦労

首里 side

いや何とか作戦成功！

皆にA・Tを体験してもらってテンションを上げさせ、論点をうやむやにして帰ってもらった。

善吉ちゃんに荊と牙を見せたら、案の定「デビルかけえ！反骨精神の塊みてーだ！」

いや確かにかっこいいのは認めるけども、反骨精神の塊ではないよ？牙には少しは混ぜてるかもしれないけど。

因みに『ロン・ホーツ・ボーン街』には『エア・ギア』原作の「小烏丸」「ジエネシス」「旧・眠りの森」スリーピング・フォレストの人々の人格をインストールしてある。

あ、空や宙ニケの性格は丸くしてある。後キリクは居ない。

俺がキリクのポジにいる。得意なのが大地の道ガイアロードと翡翠の道シエラロードだから。

後、炎の道フレイムロード、
閃律の道ライオンロードが得意である。

他の道も走るが。

話が逸れた。

お見送りしたのち、床に寝そべる。急に眠くなってきたのを感じる。
まあ疲れたしね。精神的に。

さて寝よう。

*

*

*

「……orz」

「何できて早々orzのポーズを決めてるんだい？」

今のやりとりで分かると思いますが、例の教室です。

ちくしょう油断した！これじゃさらに疲れるじゃないか！

こいつにエンカウトすると寝た気しねえんだよ！

「……今度は何の用すか。」

「君に頼みが「だが断るッ！」まだ何も言っていないんだけど!？」

「絶対めんどくさそうだから嫌です！他を当たって下さい！」

「大したことじゃない。君の異常を「絶対嫌です。あげません。」
違うから！少し『調律』してくれば良いんだよ!！」

本編で見たことない焦った表情が見れた。

「何をですか？」

「異常と過負荷をお願いしたい。」

「俺に死ねと！？1京2858兆519億6763万3865個ものスキルを全部調律しろ！？何年かかると思ってたんですか！？」

「気に入っているスキルだけで良いよ。何、ほんの56兆3849億3209万2745個さ。」

「無理だよ！終わる前に死ぬわ！」

「ざつと撫でる程度でいいからさ。」

「……どうせやるまで帰してくれないんですよ。やりますよ。やれば良いんですよ。」

「助かるよ。」

計画通り

「ははは！油断したなあーっ！アリバイプロ腑罪証！」

「ライフゼロ無効脛」

「ぐぼあっ！？」

しまった……失敗した……

何で気付かなかったんだ。この人にはライフゼロ無効脛があつたじゃないか……

アリバイプロ腑罪証明貰って逃げようと思ったのに！

「詰めが甘いよ。」

はい。ごもつともです。

必死でノルマを終わらせて開放してもらいました。

* * *

「ひどい目にあつた……」

頭パンクするかと思つたよ！

「ん？メール？」

こんな展開前にもあつたよな……

え？

M A S A K A

『やあ元気かい？神だよ。』

時計塔のイベント今日だよ『』

「ほじやつぱりいいいいいいいい……」

なんでこうタイミング悪いかな！俺に恨みでもあるのか神よ！しかも俺何日寝てんだよ！

だがしかし！今の俺にはアリバイブロッケ腑罪証明がある！

「アリバイブロッケ腑罪証明！」

ここからは多少シリアスにいかないとな

そんなことを思いつつ、時計台地下十四階―俺の拠点―へ飛んだ。

第七箱 調律と気苦労（後書き）

さて次回より時計台地下編突入！

ラスボスとして出そうと思いますが、意見はまだ募集中です。

ひっくり返すかもしれないのでよろしくお願いします。

第八箱 闇より出でし道化師（前書き）

作「いよいよ来ました時計台！」

安心院「へえ。今までとかなり違うね。」

作「そりゃそうです……ってなんで居らっしゃるんでせうか安心院さん？」

安「何、前回君のせいで散々鬼呼ばわりされたからね。借りを返しに来たのさ。」

作「え？ちよつ待つて」

安「問答無用。」

作「ギャアアアアアア……marucco様、ロサ様、感想ありますが、とう、ごさい、ました……ガクッ。」

安「それでは本編をどうぞー」

第八箱 闇より出でし道化師

時計台地下十四階に着地する。本当に一瞬で移動できた。さて、準備を始めるか。

棚から複合玉璽試作機『クリスタルペイン』^{レガリア}を手に取る。

石、牙、荊の三つの玉璽^{レガリア}の機能を複合したそれは、かなり刺々しいフォルムをしている。

搭載されているそれらを使えば石は宙^{ニケ}、牙は罅^{アギト}、荊は梨花並の走りが可能になる。

ただマシン本体に多大な負担をかけるため、長時間使うと壊れる可能性がある。

まあ三日三晩連続使用しなければ問題ないのだけれど。

A・Tを履き、些細なズレも許さぬよう、契の玉璽^{レガリア}と自らの異常^{アブノーマル}を用いて念入りに調律する。

調律を終え、床に立ち上がる。

既に脚本^{シナリオ}は完成している。後は実行するのみだ。

さあ、楽しませてくれよ？

暗がりの中、痛みを与えし王は独り嗤う。

* * *

「ごめんなさい。」

呆気ないほど簡単に頭を下げた

おいおい、王になるんじゃないのか？

こうも簡単に自分のしてきたことを否定するのか？

その程度の志で、フラスコ計画の要？
笑わせるなよ。

他人を傷つけてまで叶えなかったならそう簡単に諦めるな。
まあ、いいや。

そこどけよ。代わってやるから

お前が王^{キング}なら、俺は道化師^{ジョーカー}。

最後の切り札として、出張ってやるよ。

* * *

スキル『取捨洗択^{ゲットオアスロウ}』を使用し、床をすり抜けて飛び出し、都城王土を蹴り飛ばして床に降り立つ。

打ち所が悪かったのか、気絶してしまった。

その場にいた誰もが驚愕の表情を浮かべているが、気にしない

「何故ここに貴様がいる。首里同級生。」

「さあ？自分で推理してみなよ。得意だろ？」

薄い笑いを顔に貼り付け、はぐらかすように答える。

「……彼が十三組の十三人^{サートゥーンパーティ}の最後の一人だからさ。」

結局真黒さんが答えた。

「お久しぶりです。真黒さん。体調はいかがですか？」

調律してからかなり時間が経っている。リズムが狂い始めていてもおかしくない時期だ。

「君のおかげで大丈夫だよ。ありがとう。」

「それは重畳です。まあそんな事より」

古賀の方に歩み寄り、傷口に手を置く。周辺の細胞を調律し、治癒力を引き上げる。

「治癒力を上げたのでもう大丈夫です。数日中には歩けるようになりますよ。」

「お前は一体なんのためにここに居るんだよ……」

わけが分からないと言った表情で善吉が呟く。

「フラスコ計画が潰されるのを阻止するため。」

「何で止めようとしやがる!」

そんな事も分からないのだろうか？

「俺が不利益を被るからだよ。ま、自己紹介から始めようか。」

十三組サーティーンパーティの十三人の『十四番目』首里道人です。仲良くはしてくれなくて結構です。

フラスコ計画を止めたいなら、俺を斃してからにしろ。」

「のぞむところだっ！」

「待て善吉くん！迂闊に飛び込むな！彼の攻撃はー」

アドバイスが遅いです。残念でしたね真黒さん？

I Type 『荊』^{インフイニテアトモスオツアインテチエーン} 無限の空 『無限の荊鎖』 ターコイズ・ソニア

善吉の体に無数の『棘』が当たり、血が吹き出る。

「善吉イイイイイイ！」

まずは一人。

めだかの叫びをバツクに、俺は笑みを浮かべた。

第八箱 闇より出でし道化師（後書き）

次回も期待せずにお待ちください。
感想待っています。

第九箱 血戦（前書き）

aggardです。何書いてんのか自分でも分かりません。
アムン。

第九箱 血戦

……次は誰かな？

喜界島さんが空気を吸い込み始めたな。

音波砲が来るな。

なら……

I T y p e 『石』インフイニテアトモスオンアインテストラタム無限の空『無限の地層』グラビト・サフォカーテ』

先手を打ち、『振動』で固めた空気の塊を喜界島さんの前方に落とす。

「な、なんで音が届かないの!？」

甘いな

「訊けば教えてもらえるとでも？」

「ッッ！」

悔しそうだね。まあ一番戦闘に不慣れだろうし。

ん？いつのまにか腕が掴まれーって背負い投げ!？

腕折れてるのによく出来るな!

なす術もなく床に叩きつけられ、そのまま腕を固められた。

かなり痛いけど、ソニアの道の痛みに比べたらちやちなもんなだよ！

エア・ギアを知らない読者様のためにソニアの道に関する説明をば。

え？メタ発言？気にせずに。

超人的な過呼吸を行い肺にかかる圧力を高め（4気圧）、通常の4倍もの空気を体内に取り込み、体内に大量に溶け込んだ窒素（この場合の窒素分圧2.4）は、ほんの少しの減圧（息を吐き出すこと）で体中の隙間（背骨も含める各関節）に気泡となり現れるが、この時全身に気を失う程の激痛が走る。気泡状態の窒素はエアクッションの役割を果し、関節の可動域を限界以上に広げ、人間とは思えぬ動きを可能にさせる。（Wikipediaより）

説明からも分かるとおり、凄まじい痛みが走る。よって、関節技ごときの痛みでは俺は止まらない。

閑話休題。

「ーふっ！」

足の筋肉のみで強引に体を起こしー無論腕に阿久根先輩を捕まらせたままであるーその体制から彼を思い切り地面に叩きつける。

やっと放してくれたので、そのまま距離をー

「グッ!？」

後ろから後頭部にハイキック!? ってことは―

「……………これは驚きだ。」

七割程度だったとはいえ、ソニアロード インファイニティ トモスニア 荊棘の道の無限の空をまともに食らって立てるか。

「あの程度で……………終われるかよ!」

またキックだ。しかも結構闇雲に蹴ってきやがる。

「ーッ!?!」

足元に阿久根先輩!? しまった体制を崩された!

こめかみにキックが入る。めちゃくちゃ痛い。

……………舐めやがって。その程度で勝てるつもりかよ。

ホンキヲミセテヤルヨ

『石』の超振動を体に伝え、服と筋肉を硬質化させて『鎧』に変える。

副産物で二人が吹き飛んだ。

逃がすかよ。

空気を固めて飛んでいく善吉を強引にその場に固定する。

「ぐっ！……なんで体が動かないんだよ！」

地面から三mくらいか。

宙^{ニテ}をリスケットしてあれやるか。

「……空気に振動を伝えて『固めた』からだよ。」

パキパキパキ

氷を踏みしめるように空気を踏み、善吉のところまで行く。

一歩進むごとに善吉の顔が青ざめる。

ガタガタ震えてるし。

「好い加減夢見るのやめろ。『命』程度賭けたぐらいで何でも思い通りにいくなら、ドブネズミだってライオンを殺せるんだよ。」

蹴りを入れる。

ただそれだけでスパコンを壊しながら飛んでいった。

……多少やり過ぎたかな？

「ガアアアアアアアアアッ！」

会長さんが理性無くしたな。

力で強引に『振動』を破りやがった。

こっから全力で行って、どの位持つかな？

きっと今、瞳孔に十字架が浮かんでいるだろう。

そこまでやらないと勝てない。

さあ、始めようか。会長？

バケモノ
会長と重力子の戦いの火蓋が切つて落とされた。

第九箱 血戦（後書き）

次回で決着です。

ところで皆さん、誰にどんなA・Tを使って欲しいとかありますか？
あれば感想と一緒に送ってくださると嬉しいですよ。

第十箱 血戦の血着と訪問客（前書き）

戦闘シーン難しい！

首「ダメな奴。」

作「ヒドッ！？ぼるてっかー様、感想ありがとうございます。」

ではどうぞぞ！

*注 主人公の過去は五箱あたりを見てね！

第十箱 血戦の血着と訪問客

髪の色が薄くなり、凄まじい目つきになったためだかが跳躍する

しかし、今の俺の体には、グラビティチルドレン重力子の特殊能力が備わっている。

その能力は、「ソリッド・センシティブ立体把握幹」、「バイオマス・ジャイロスコープ生体羅針盤」と呼ばれており、この二つのスキルを用いて目に見える全ての物体を二次元的に捉え完璧に近い精度で相手の次の”アクション”を予測することを可能にしている。

故に回避など造作も無いはずだった。

「ゴホッ!?!」

くそっ、アクションを予測できても、体が反応する前に捉えられてしまう!

つかこの威力じゃ『インフイニテイトモスフィア鎧』もそんなに保たない。

……牙の無限の空ならなんとかできるかもしれないが、あんなもん撃ったら会長が挽肉になりかねない。

どうしたもんかね。

飛んでしまった理性が少々戻ってきたらしく、僅かー本当に僅かだが会長のスピードは落ちてきている。

そしてーようやく隙を見せた。

チャンス!

Trick Bloody Fang Ride fall” L
evia than”

足から三日月状の巨大な衝撃波を放つ。体を切り裂かないよう、鋭さを加減して撃つ。

「巨大なサメの牙が会長を飲み込むほどの速度で迫る。

避けるかと思つたが直撃した。

反応できなかったのか？

「ー！？ガッ！？ガハアッ！」

後ろから殴られた。やべえ、骨がミシミシいつてるよ。

分身かよ……

スパコンに突っ込み、寄りかかって座る形になった。

そのままつかつかとこちらに向かってきて、拳を振り上げる会長。

あ、死んだな。これ。

転生してからの人生、短かったな……

すり抜ければいいじゃないかと思つた人もいるだろうが、かなり力ロリーを消費するので、憔悴し切つた今の状態じゃ無理だ

せめてもの抵抗として腕を上へ上げ、振動で硬化させる。

来るべき衝撃に備えて目を瞑り―

「やめるめだかちゃん。やり過ぎだ。」

四人が押さえ込んだ。

「少し落ち着いたらどうだい？理由もなしに攻撃するなんて君らしくもない。」

「……お兄様。こやつは善吉をあそこまでボロボロにしたのです。許せるわけが「やはり冷静さを失っているね。あんな戦いの後だから無理もないけど。」……………」

「めだかちゃん、気づかないかい？彼はさっきから攻撃してきた相手に反撃することしかしていないよ。」

「「「！……！」「」」

やっと気付いたか。

善吉相手には多少はやり過ぎだが、他の相手に対しては完全に正当防衛の範疇だろう。

しかしここはあえてこう言っとくか。

「……喧嘩を売ったのはこちらです。フラスコ計画に関して譲る気は無いですが、その点はこちらに非がありました」

「……何故そこまで計画に執着する？」

「……あなたにいう必要は有りませんし、聞かない方がいいです。後悔しますよ?」

神に頼んで作ってもらったあの過去が理由だ。

あれ、俺の中に実体験として組みこまれているからな……

「『黒神グループ』ダラビテイチルマレン『重力子』『廃棄』キーワードはこの3つ。後は自分たちで調べてください。最も、公にすれば国家転覆の可能性もあるから」

「私の家が関係していると!?!」

「正確には君らのお父さんです。あ、質問したりしないでくださいね?俺の命が危ないから」

「どつという意味だ!?!」

他の連中も割り込んできたな

あんま言いたく無いんだけど…

「人体実験を行っていた証拠なんて、消したいでしょう?ではこれで」

アリバイブロック
腑罪証明で自分の部屋へ跳ぶ。

いや〜過去を話すのって疲れる

*

*

*

後日めだかが家に来た。

データベースにアクセスして真実を知ったようで、ひどくショックを受け、涙をポロポロこぼしながらしきりに謝っていた。気にしていないとだけ言っておいた。

ついでに真黒さんも来た。泣いてはいなかったがこちらでも謝罪していった。

そして今、また呼び鈴が鳴った。

「最近訪ねてくる人が多いな……はい、どなたですか？」

ドアを開けると―善吉が立っていた。

「……何か用でも？」

多少警戒しながら問いかける。この間の仕返しに来たのかもしれない。

―と

いきなりドアの前で善吉が土下座した。

「図々しいことは分かってるけど、頼む！俺にこの前使ってたみたいなA・Tを作ってくれっ！」

「……は？」

こんな声を出した俺は悪くないと思う。

そしてこれが、善吉超魔改造の始まりだった。

第十箱 血戦の血着と訪問客（後書き）

次回から原作ブレイクの嵐 and 善吉魔改造！期待せずお待ちください！

第十一箱 特訓（前書き）

作「球磨川ああああああああああああ！
死ぬなあああああ！」

首「うるせえよ！」

作「ごめん。取り乱した。」

何かエアギアがメインになってる気がする。

キャラ崩壊激しいですがどうぞ！

第十一箱 特訓

首里 side

「と、とりあえず頭上げて入ってください！まわりから好奇の目で見られてますから！」

「お、おう。おじゃまします。」

善吉を家に招き入れる。

「……それで？敵に土下座してまで力を求めようとするのはなぜです？あの後一体何が？」

知っているが。

「……中学時代の敵が転校してきた。」

ぼつぼつと話し始めた善吉。手は膝の上で白くなるほどぎっく握られている。

「そいつからめだかちゃんを守りたい。この前まではたとえなにが相手だって命をかければなんとかなると思ってた」

そこまでしゃべって顔を上げる。

「ただとお前には勝てなかった。」

「そりゃ俺は異常の中でも別格らしいです」

「相手は最悪の過負荷マイナスなんだ！お前とは違うベクトルとはいえ、厄介なのは間違いないんだ！こんどこそ命を賭けて守りてえんだよ！」

「それでA・Tが欲しい…と？」

「頼むツ！虎とまでは言わねえ！ドブネズミじゃなく、番犬にさえなれば良いんだ！」

……覚悟は本物ってことが。

「本来あれは『空を飛ぶことを楽しむ』をコンセプトにしているんですがね……生徒会長を守るといのがあなたの選んだ『道』なんですね？」

「あ、ああ。」

少し戸惑っているようだ。いきなりこんなこと訊かれたらだれでも困惑するだろうが。

「……分かりました。協力しましょう。」

「本当か！？」

がばつと顔を上げる善吉。

「ただし。」

俺は悪い笑みを浮かべて言う。

「代金はキツチリカツチリ払ってもらいますよ？三十万円と言いた
いところですが、初回サービスで半額にしておきましょう」

一瞬の沈黙の後

「高ええええええええええええ！なんだよ十五万円て！」

「八十km/時でるモーター、高性能なクッションシステム、コン
ピュータ制御にしては良心的でしょう？原付バイクだって十萬する
んですよ？」

「いやそれはそうだが！」

「まあいいです。出世払いにしておきますから必ず払ってください
ね？」

「（え、笑顔が怖い！払わないと内臓売れとか言い出しそうだ！）
なんか失礼な事を思われた気がする。

「まずあなたの適性を調べますからこっちに来てください。こない
だの『ロン・ホーツ・ポーン・街』に行きますから。」

* * *

「……orz」

「……なんとというか、うん。ドンマイ。」

orzになっている善吉の肩に手を置く。

現在五つの玉璽レガリアを試したが、全部玉砕である。

風の玉璽レガリアは暴走させてビルに激突し、

炎の玉璽レガリア、石の玉璽レガリアは自分が技トリックを浴びてしまい、

雷の玉璽レガリアはワイヤーが絡まり使用不能に。

荊の玉璽レガリアに至っては発動すら出来なかった。

契を除いてあと二つしか無いのである。

「諦めるな！後轟と牙が残ってる！」

「キャラ違くない？」

「こつちが素。とりあえず轟履いてみ。」

「……分かった」

「結構深刻！？」

結局、強靱な脚力が必要不可欠である『轟』に決まったのだが―

「先生どうしよう……」

『エア・ギア』の作中に轟の玉璽レガリアを使える人があんまないのをつかり忘れてた！

とりあえず轟の道を守るライダーを上げてみよう！

・下ネタ好きの関西人

・男の娘とヘタレのSMコンビ

・ラジカセに玉璽レガリアしこんでるおっさん

これが……絶望か……

アーサーとシャーロットのSMコンビは論外だ。あれはヤバイ。下手すると善吉が変な方向に目覚めてしまう。

一番人柄的に良さそうなのはドントレスだが、いかんせん使ってるのがラジカセだ。参考にはならんだろう。

と、なると……ヨシツネに頼むしかないのか。

まあいいか。

大丈夫だろう。きっと。

* 轟の玉璽レガリアの説明

ラム・ジェット理論という原理を応用させたもので、前方からの風を圧縮、後方に噴射させることで推進力を生む。押しよせる風が強ければ強いほど、更に加速していく。それが、己への風が強ければ強いほど、その風を自らの力に変えて猛り狂う風車のようにも思えるため、“風車の力”や“風車の理”と呼ばれる。風の流れを吸収するため、「翼の道」や「血痕の道」の天敵といえる。但し、発動

には玉璽自体が高速運動をしていないといけないためヨシツネの様な凄まじい脚力が必要である。

「牙」や「風」などのエネルギーを圧縮し、ラムジェット機構で空気を高温かつ高圧にして作った“超臨界流体”により、目に見えない「壁」を作り出す。

通常時はフレームがジェットエンジンのような形になっている。

*

*

*

もくろみが甘かった……

下ネタ連発しやがってあの馬鹿！

善吉の顔が引きつってるじゃねえか！

「生徒にぐらい真面目に接しろやヨシツネEEEEEEEEEEEE！」

「へブツ！？何すんねん大将！」

「やかましい！下ネタ控えろ！胸や下着の話題ばっか出してんじゃねえよ！」

「えゝ彼も健全な男子高校生やし興味あると思うねん。せやから人生の先輩が色々教えてやろつとやな……」

「もっと大事な事を教えろおおおお！大体生まれて（完成）数ヶ月しか経ってねえのに人生を語るとはちゃんちゃらおかしいわアアアアアアアア！」

「それは言わん約束やて。ま、中々素質はあるわ。金の卵ってとこ

やな。すぐ『王』レベルになれるぞ。」

「そりゃよかった。じゃ、しばらく預ける」

「了解や。ほな行こか善吉君。女口説きの神髓って奴を教えたる。」

「いや反省しろやあああああ！」

もうやだ……

* * *

体に戻ったのち、『ロン・ホーツ・ボーン・街』の時間の進みかたを30倍にする。

一日で一ヶ月分の修行である。

あいつが師匠なのが果てしなく不安だが仕方あるまい。諦める。

一日経過した。入ってみよう。

どう進化したかな？

「オオオオオツ！轢き潰せ！」

ドカアアアアン！

……ええー。

完璧に魔改造されてるよ。ターゲット轢き潰しまくってんじゃないか。

「おお！大将！どや？中々の仕上がりやろ？多分バトルレベル100はいつとるで？」

「素質の問題か……」

「教え方がよかつたって話しにはならん！？」

「3%くらいは混ぜてるかもな」

「酷いやろ！」

「そんで実戦やらせた？」

「無視かいな！……まだや。」

「ちよつどよかった。相手はもう決めてる。」

「誰や？」

「今から連絡する。」

電話を掛ける。

『もしもしー何の用ー？』

「ワンコールで出るってことは暇してるんだな？」

『死ぬほど退屈だよ！』

「『キューブ』の試合させてやるからすぐ広場まで来い。」

『そいつ強い？』

「歯ごたえはあるはずだ。」

『うわあ楽しみだなあ！』

「はしゃぎ過ぎて相手を壊すなよ？ウエルキン……いや、水棲の魔^オ龍^{ルカ}？」

『分かってるって！』

通話を切る。

「……水棲の魔龍^{オルカ}をぶつけるなんて何を考えとんのや？大将？」

珍しい。ヨシツネが真剣だ。

「お前の指導だし、相性は良い。大丈夫だろ」

やれやれとばかりにヨシツネは首を振った。

第十一箱 特訓（後書き）

次回は善吉 vs 『ジエネシス』の牙の王ウエルキンです！

期待せずお待ちください。

第十二箱 努力対天才（前書き）

「何なんだろうこの時間かけた上クオリティが低下するって現象。」

首「だってお前ダメ人間だし。」

作「ねえ。お前なんでそんなにおれに辛く当たるの？」

首「見てるとイラつくから。」

作「……もう良いよ……フレ임様、marucco様、ぼるてつか
様、感想ありがとうございます。」

首「では本編をどうぞ。」

第十二箱 努力対天才

唐突だが、ウエルキン・ゲトリクスは孤独だった。

『エア・ギア』において、彼に釣り合う実力者はほとんどおらず、大抵の者は戦あそぶと壊れてしまうのである。

わざとやっているわけではないのに。

故にウエルキンは孤独だった。

常に自分と対等あそに戦あそべる者を探していた。

だから首里から連絡が来た時、すっ飛んで来たのである。

*

*

*

首里 side

「せやからまだ早い言つたやろ」

「相手はあの『海の魔龍オルカ』やぞ？一時間粘っただけで、大したもんやと思っけどな〜ワイは。」

「アイツ、本当にA・T始めて一ヶ月しか経ってねえんすか？首里さん。そんな素人には見えねえんすけど」

上からヨシツネ、武内空、南樹の順だ。

善吉vsウエルキンの『キューブ』（四角い密室内での一対一の

潰し合い。最も過激で最もポピュラーで最も危険な戦いはほぼ決着が付いていた。

壁のほとんどは瓦礫と化しており、その上にボロボロの状態で膝を突く善吉と、多少楽しそうなウエル（＝ウエルキンの渾名）の姿があった。

今まで殆どがワンサイド一方的な虐殺だったウエルにとっては、久々の『壊れにくい玩具』であったためだろう。

一方の善吉は、何度かウエルの『牙』を受け止め、『壁』を打ち返したりしていたのだが、凄まじい勢いで張られた『牙』の弾幕の前にはいたずらに体力を削られるだけであった。

「ゼンキチ……だっけ？ 久しぶりに楽しめたよ！ ありがとう！」

年相応の無邪気な笑みを浮かべるウエル。

「ふっ、ざ、けんな……俺は……まだ終わってなんかねえ！」

瓦礫を押しつけて立ち上がる善吉。

「中々に無謀な奴やの。」

「ま、そりゃそうだ。何せー」

「俺だつて……ストームライダー暴風族の端くれだッ！」

ドカッ！

轟の推進力を利用した蹴りがウエルに決まる。

「あいつはただ必死に努力を積んできた人間だからな。」

* * *

「くそっ……なんてザマだよ……」

人吉善吉は慢心していた己を呪った。

実戦があるとヨシツネから聞かされ、意気込んだまではよかった。

相手が子供であり、しかもかなりの実力者であるということを知った時は驚いたが、子供であるなら楽に勝てるだろうと油断したのである。

その結果がこれだ。

圧倒的な『牙』になすすべもなく押し切られた。

何度か『壁』による反撃を試みたものの、いずれも巨大な『牙』に一撃のもとに粉碎された。

不意に、もういいか、という感情が湧き上がる。

じぶんは初心者なのだ。相手に実力とキャリア、共に負けているのだ。

「ゼンキチ……だっけ？久しぶりに楽しめたよ！ありがとう！」

「この言葉で、そんな迷いも吹っ飛んだが。」

「ふっ、ぎ、けんな……俺は……まだ終わってなんかねえ！」

ここまでこけにされて黙ってはられない。

まだ始めて一月も経っていない。

しかし、

「俺だつて……ストムライダー暴風族の端くれだッ！」

轟を応用したサバットの蹴りを決めた。

完全に不意をつかれたらしく、綺麗に吹っ飛ぶウエルキン。

「まだ動けたの？この一撃で楽に「喋ってる場合かよ？」「え？」

- Trick 『Satan Pressure』

比較的小さな壁を重ねるようにして叩きつけるトリック技である。名前から分かる通り、善吉オリジナルのものだ。

蹴りで体制を崩していた

ウエルキンに避けられるはずもなく、そのまま押し潰され、瓦礫の中に埋れた。

更に追撃として『壁』を撃つたものの、凄まじいまでのジャンプ力

で回避された。

「ホントに子供かよ……」

思わずぼやく。コンクリート塊を跳ね飛ばして出てくるとか。

- Trick 『Bloody armor over skill
Giggaers Cross』

「もともとこつちがオリジナルなんだよっ！」

先程自分が放った技の牙バージョンが迫る。

しかし、これは恐らく罠。次の本命に備えないと

ッ！

ウエルキンの背後に鯨が見える。

「これが技影ってやつか。」

「これで終わりだよ。無限の空、無限の牢獄」

しまったと思った。

何時の間にか周りを牙が取り囲んでいる。

まさしく『檻』。

「閉じる。」

ウエルキンの声が響く。

なすすべもなく、彼の全身は牙に噛み砕かれた。

首里 side

今度こそ終わったな、ありゃ。

ウエルの牙は水分を爆破させることも可能だ。生物中の水分だって例外はない。

それをあんだだけ食らって生きてる時点で異常だ。

あいつ本当に普通か？
ノーマル

あ、ウエルが何か言って背を向けた。

大方また遊ぼうとでもいったんだらうー！？

「冗談やる！？ウエルの牙あんだだけ食らってまだ立ち上がるちゅうんか！？」

空が驚いてるよ。無理ないけど。

「しかもただ立ったわけやあらへん……見てみい。技影シャドウだしとるわ。」

ヨシツネも感心してる。どことなく嬉しそうだ。ようやく師匠としての自覚が出たんだらうか。

それはそれとして善吉の技影シヤドウである。

ハルバード
戦斧を持ち、黒い甲冑を纏い、背中からは一方通行のごとき黒翼が
伸びた騎士のような技影シヤドウ

何あれ？

デビルデビル言ってるから悪魔の技影シヤドウだと思ったんだがな。

あれじゃ悪魔というか墮天使だ。

しかも尋常じゃないプレッシャー放ってるし。具体的には空やイツ
キが引くぐらい。

そして、善吉は血塗れの体に鞭打って壁登りをしだした。ウォールライド

そして空中に飛び上がり、足を振り上げ

下向きに『キューブ』を行っていた空間を全て押し潰す程の『壁』
を放った。

騎士の戦斧が、鯨を叩き潰した

第十二箱 努力対天才（後書き）

一言でも良いので感想を頂けると嬉しいです。

第十三箱 同盟と忠告（前書き）

短いです！

首「ぶらつく×4様、ギルダーツ3世様、感想ありがとうございます！
しました！」

それと……

作「PVが十万、ユニークが一万五千を突破しました！こんな駄文
を見てくださってありがとうございます！」

では本編をどうぞ！

第十三箱 同盟と忠告

首里 side

善吉は、戦いの終了直後にぶっ倒れたため、引きずって現実リアルの世界に戻った。

因みに善吉とは親友になった。

その翌日、俺は『ある物』が入ったケースを抱え、生徒会室に向かっていた。

今日は会長が『生徒会戦拳』の宣言をした日である。

球磨川つて実際見ると案外普通に見えた。そんな風に見えるのは俺が過負荷マイナスを所持しているからかもしれないが。

生徒会室の前に着くと、善吉の声が聞こえてきた。

「がんばる。箱庭学園の庶務は俺しかいねーって、改めてお前に思わせてやるよ」

ここまででは原作通りだが、こっからは俺がぶっ壊してやる。

助かると知っているとはいえ、友人が傷つくのを見すみす見殺しにする？冗談バラサイトシーイングじゃない。

欲視力？知らねえよ。いざとなったら俺が貸してやれる。

そろそろシリアスな空気をぶち壊しにしつつ入ろう。

「ちわー。三河屋です。」

「あらサブちゃんいらっしやい……って違う！あなた誰？」

いい反応です永遠の幼^{エターナル}「今失礼なこと考えたわね？」……この世界では読心術って基本スキルなのか？

というか阿久根先輩、喜界島さん、戦闘体制に入らないで。

「何が目的「おっ！A・T出来たのか道人！」……え？」

阿久根先輩の言葉はあっさり善吉に遮られた。

「あー出来たぞ。最終調整はここでさせてもらっけどな。スピードとパワー、どっち重視にする？」

「パワーで頼むわ。」

「了解。今から調律する。」

背中に背負った『契の玉璽^{レガリア}を展開し、善吉の『音』に合わせて最適な調律を行う。本来何人も必要だが、自らの異常のおかげで一人で『音』の聴き取り、最適な状態のはじき出し、最終調整まで行える。

因みに微調整は五分程で終了する。

「ほれ、出来たぞ。」

完成した善吉専用のA・Tを放り投げる。ヨシツネの物と殆ど同じ

だが、色は漆黒である。

無論轟の玉璽レガリア搭載である。

「うわっ、と。投げるなよ！危ねえだろ！」

「んなやわじゃねえよ。」

「ね、ねえ！私と阿久根先輩は全く状況が飲み込めないんだけど！
何で十三組サードラインの十三人パーティーだったあなただがここにいるの！？」

ようやく突っ込んだか。生徒会メンバーじゃ比較的まともな喜界島さん。

「善吉にこいつを届けにきたのと、協力の申し出」

「感謝するぞ首里同級生。」

その日は解散した……が、俺は校舎裏に善吉を呼び出した。

「どうしたんだよ道人？」

「庶務戦に関するアドバイス。すなわち対球磨川先輩の策を授けようと思つて。」

さらりと爆弾を投げる。

「はあ！？なんで初戦に球磨川が出てくるなんて思つんだよ！あいつ向こうの総大将だろ！」

「そこが過負荷マイナスの過負荷マイナスたる所以だ。最悪を想定して訓練しとけ。それと、相手が降参しても油断するな。重要な事を言いそうな時は間違いなく何か狙っていると思え。」

「……分かった。気をつける。」

「じゃあな。」

背を向けて歩きだす。

「道人。」

「善吉に呼び止められたので、振り向く。」

「絶対白星で飾るからな」

「……楽しみにしてる」

あいつはもうこれで大丈夫だ。後は名瀬先輩がなんとかしてくれるはずだ。

さて次は庶務戦当日まで暇だ。過負荷組の襲撃があるから見に行かないけど。

ビデオ置いていて撮るか。

第十三箱 同盟と忠告（後書き）

感想よろしくお願いします。

第十四箱 過負荷人形（前書き）

懲りずに投稿です。ギルダーツ3世様、感想ありがとうございます。

今回、次回はかなりグロくなります。

過負荷の名前は二つ名メーカー参考です。

では、ごっげ。

第十四箱 過負荷人形

首里 side

今日は庶務戦当日か。俺も一応赤い生徒会コスチューム（戦拳モデル）を貰った。地味に嬉しいのは秘密だ。

さて、どうしようか。

三人相手にしたって楽勝で螺子伏せられるので大丈夫だが、もし原作通り『冬眠と脱皮』になったら世間体とか色々やばくないだろうか。

志布志の服を剥いで着る阿久根先輩……想像しちゃだめだ。うん。

でもやっぱ防がなくなっちゃいけないと思う。

で、現在張り込み中。もうちょっとしたら過負荷が二人殴り込みにくるはずだ。

あれ、江迎さん来たっけ？若干うる覚えになってるな。まあ、いいや。

お、お出ましみたいだ。

なんか言ってるみたいだけど聞こえない。

因みに今一階上にいる。A・Tはなしだ。

さて、飛び降りるか。

床をすり抜けて下に降りるー（落ちる）

「うぐあっ!?!」

…… やっちまった。蝶ヶ崎さん踏み潰しちゃった。緊急事態だッ！
なんてどこぞのプロポーズ魔の台詞が脳内で再生された。俺って末期なんだろうか。

「誰だてm「あんたら惚けてないでさっさと逃げろ！戦拳にすら参加出来なくなるぞ！」途中で遮るんじゃねーよ！」

パンツ！

無効脛使うの忘れてた……… やっぱ抜けてるな俺。
ライフゼロ

傷の痛みはそれ程でもないけど、開く時の衝撃がばねえ。

「首里ッ！」

日之影先輩が来ようとしてるけど、

「今のあるたらじゃ勝てないし足でまといだ！とっくと逃げて長者
原先輩を呼んでくるなりしろ！死ぬぞ！」

つい素が出ちまったよ。

「……クソッ！」

全員逃げたな。無効脛ライフゼロで志布志と江迎のスキルを押さえ込めてよかつた……

「一人で残って足止めってか？いかにも幸福プラスの考えそうなことだぜ。」

何言ってるんだこのスケバン？致死武器スカーデッドや不慮エンカウンターの事故、荒廃ラフラフレシアした腐花程度で勝てるとも思ってただろうか。」

「テメエ……」

しまったただ漏れだったか。視線で人を殺せる程の殺意を持って睨んでくるよ。

「ぶざけてんのか……？」

おまけに蝶ヶ崎先輩起きちまったよ。早くも裏モードになっちゃってるよ！

「ぶぶつ、腐らせ尽くしてあげましょう」

江迎さん、光の消えた目でんなこと言わないで。すごく怖いから。

まあいいか。

全員過負荷で杭くい尽くせばいい。

「来いよ」「俺の過負荷で杭くい尽くしてやる」

安心院から真似た57兆以上のスキルの内、最も最悪な過負荷マイナス。

その名は、
『アトミックフレイク瞬殺人形』

*

*

*

惨劇としか言いよもの無い情景である。

志布志は鉄の杭で壁に磔にされ、蝶ヶ崎は鎖骨とあばら骨の間を肩から胸へ上から下に抜けるように杭を通されて立ったまま気絶しており、江迎は脳を揺さぶられて気絶している。

「首里はそれらを、無感動に、無表情に、無慈悲に見下ろしていた。白かった髪は黒く、赤かった瞳は青く変色していた。

わずか十分程の間に起きた出来事である。

マイナス 過負荷 アトミックフェイク 『瞬殺人形』。

簡単に言えば、感情を無くす代わりに戦闘力を大幅に引き上げるスキル。

つまり発動すれば、解除するまで高性能の殺戮人形キリングドールと化する。

その攻撃力は、テマング光化静翔使用時の日之影空洞を凌駕する。その上他のスキルも重ねがけして使用可能である。

「「やれやれ」「こんなもんか」「

これを使用すると口調も考え方も過負荷よりの状態になる。

「「もうそろそろ庶務戦も終わった頃だろうし」「とっとと地上に

出るか」

志布志と蝶ヶ崎に刺さった杭を引っこ抜き、全員を抱えて時計塔の入り口へと腑罪証明アリバイプロックで跳ぶ。外に出て、グラウンドに向かう。原作と違い、人吉は完勝したようだ。

穴の近くまで歩み寄る。報告を受けて駆け出そうとしていた会長が、動きを止めた。

「ーッ!? 首里……同級生なのか……?」

「ああ」「俺が」「正真正銘首里道人さ」「過負荷を発動してるけどな」

球磨川がこちらを見る。その表情が一瞬で驚愕に染まる。

「……僕の仲間に」『何をしたのかな?』『首里くん?』

僅かに声が震えている。キレかけているようだ。仲間思いが出てるな。

「やだなあ」「球磨川先輩」「襲ってきたから倒しただけです」

「これは正当防衛。悪くて過剰防衛です」

「だから」

「俺は悪くない」

薄っぺらい笑みを顔に貼り付け、言い放った。

第十四箱 過負荷人形（後書き）

善吉 v s 球磨川と過負荷 v s 道人のバトルは次に書きます。

第十四・五箱 過負荷達の惨劇（前書き）

スーパー駄文です。短いです。心臓の弱い方は見ない方がいいです。

ぼるてっかー様、ギルダーツ₃様、感想ありがとございました。

過負荷対主人公です。どうぞ。

第十四・五箱 過負荷達の惨劇

志布志 side

「っはっ!？」

目が覚めると保健室のベッドの上이었다。隣には蛾々丸が寝ていた。あいつにやられたキズは無かったかのように消えていた。おそらく球磨川さんのおかげだ。

「……………」

未だに震えが止まらない。奴は最狂のマイナスだった。

* * *

「んなこけおどしがアタシラに通用するわけねえだろうが！」

致死武器スカレードを相対する首里に対して使用する志布志。

過負荷マイナスなら精神的トラウマ外傷を開かれるのは相当応えるだろう。

すぐさま相手は悲鳴をあげてうずくまるはずだった。

ーしかし、

相手はまったく変化を見せず、無表情で杭を構えて突っ込んできた。

これには志布志も驚いたが、すぐに作戦を変えた。

(ココロじゃなくてカラダの傷を開いちまえば問題ねーだろ！)

相手の傷の50%を開く。普通なら激痛で立つこともかなわない筈だ。

そう、普通であれば。

噴き出す血を全く意に介さず、首里は志布志の右手を捉え、壁に叩きつけた。

そしてコンマ一秒もためらわず、杭をその手に突き刺した。

肉と骨が潰れるグシャリという音が響き、返り血が首里の顔に飛び散る。

「がああああああつ！痛えな！離せッ！」

志布志は咆哮し、さらに首里の傷を開く。

しかし首里の表情は欠片も揺らがない。

グシャッ

グシヤッ

グシヤッ

湿った音と悲鳴が響く。四肢を磔にされた志布志の悲鳴である。

未だに意識の残っている志布志に業を煮やしたのか、首里はどこからハンマーを取り出し、志布志に刺さる杭に向けて振り下ろした。

ーが、志布志に届く前にハンマーの頭が腐り落ちた

江迎怒江が立ちはだかったのである。

「調子に乗るのもいいかg」

台詞を言い終える事なく、江迎の体は宙を舞っていた。首里が全く手加減せず、全力で彼女の顎を蹴り抜いたためだ。

気を失って地面に転がる江迎を見て首里はたった一言

「一人目」

と漏らした。

その一言は蝶ヶ崎と志布志に多大な恐怖を与えるには十分過ぎた。球磨川が全てないまぜにして台無しにするとするのなら、首里は全てを飲み込み破壊するといったところか。

本能で恐怖を感じた蝶ヶ崎はそれを首里に押し付けようとするが、全く効果は無い。既に無効脛ライフゼロで過負荷は無効にされているのだから。

「（なんで過負荷が効かない！？ここは引くしかない！）」

結果、蝶ヶ崎は逃走を図った。

しかし

ドスッ

「ギヤアアアアアアアッ！」

「誰が逃げていっつったよ三下が」

上空からの急降下攻撃に対応できず、鎖骨の内側に杭を刺される蝶ヶ崎。

初めて感じた痛みらしい痛みに絶叫し倒れる蝶ヶ崎。

「倒れていいとも言ってるぞ」

新しいハンマーが杭に振り下ろされた。

杭は肋骨の裏を通って脇腹から飛び出し、床に打ち付けられた。

蝶ヶ崎は痛みと恐怖で気絶した。

それを見ていた志布志も気絶した。

以上が戦い、いや、虐殺の描写である。

第十四・五箱 過負荷達の惨劇（後書き）

感想をいただけると作者は泣いて喜びます。次回は善吉VS球磨川です

第十五箱 天敵（前書き）

すみませんでした！次回予告を詐欺りました！どうしても戦闘が書けませんでした！

要望が多ければ球磨川VS善吉を書きたいと思えます。

重ね重ね申し訳ありません

第十五箱 天敵

三人称 side

「あれ？」「もしかして」「球磨川先輩怒ってます？」

ボロ雑巾のようにした過負荷達マイナスを抱えながら変貌した道人はへらへら笑う。

正面には、いつも通りの表情ながら拳を強く握りしめる球磨川。

生徒会メンバーは呆然としている。

「ぷぷっ」「自分だって人の仲間と同じようなことしてきたくせに」「よく怒りの感情が抱けますね」「その凶太さには感心しますよ」「自分がされて嫌なことは人にもやっちゃいけないですよ？」

あくまでも正論で球磨川のインディンティを崩そうとする道人。

「………違うよ」「大抵のことは僕がやったんじゃないよ」「僕が行ったらそうなってたんだよ」「しかも君も同じことしてるじゃないか」「だから」「

「『僕は悪くない』とでも言うつもりですか？」「うつわー疫病神がここにいる」「夕チ悪っ！」「いつそ死んだらどうですか？」「あなたのせいで結構な人数が不幸になりましたよ？」「それから僕は良いんですよ」「だってただの過剰防衛ですし」「

「『周りを不幸にできるっていうのは過負荷マイナスに対しての最高の褒め言葉だぜ』『補足しておくよ』『過剰防衛は立派な犯罪だ』『死刑になるんじゃないかな』」

「『傷害罪から減刑されるし』『初犯かつ未成年なんで』『下手したら罪が消えちゃいますよ』『残念でしたね』」

「『こんな人間を野放しにするなんて』『日本の法律はなんて甘いんだろう！』」

「『だから過剰防衛ですって』」

「しかも」

そして、道人は過負荷マイナスに対して過負荷マイナスな一言を吐き出す。

「『不条理や』」

「『理不尽や』」

「『嘘泣きや』」

「言い訳や」

「いかがわしや」

「インチキや」

「墮落や」

「混雑や」

「偽善や」

「偽悪や」

「不幸せや」

「不都合や」

「冤罪や」

「流れ弾や」

「見苦しさや」

「みっともなさや」

「風評や」

「密告や」

「嫉妬や」

「格差や」

「裏切りや」

「虐待や」

「巻き添えや」

「二次被害を」

「愛しい恋人のように受け入れられるのなら」

「否定や」

「拒絶や」

「無関心だって受け入れられるでしょうっ？」

球磨川の様子が崩れた。怯えるような表情を見せ、そして、

ーキンッ！

螺子と杭がぶつかる音が響く。

「と、いうか」「人類最弱とかおっしゃってますが」「そんな形状の武器で人の体を貫けるって」「世間では力のある部類に入りますよ？」「んじゃ」「また今度とか！」「」

踵を返して歩き出した道人を、球磨川は憎々しげな目で睨みつけていた。

*

*

*

「……………何だつて球磨川はあんなに怯えてたんだ？キャラの違いや行動には驚いたけど、言ったのは正論だったろ？球磨川なら簡単に破れるはずなのに……………」

校舎に向かって歩き出しながら善吉が首を捻る。

「……………恐らくあの状態の彼は過負荷^{マイナス}にとって天敵なんだろう」

答えたのは真黒である。

「どういふことなんですか？」

「過負荷^{マイナス}における彼の存在は僕達における過負荷^{マイナス}と同じってことだ」

「なんとなく分かりました……………けど、道人はどうやってあの状態に？」

「めだかちゃんの乱神モードや改神モードみたいなものか、スキルの効果だろうね。しかし、これから球磨川君がどうするか気になる。彼は天敵になったことはあっても天敵になられたことは無いはずだ……………どんな反応をしてくるのか全く予測不能だ。彼が狙われないと良いけど……………」

重い雰囲気、生徒会メンバーを支配していた。

第十五箱 天敵（後書き）

書記戦についてアンケートを取りたいと思います。

？原作通り志布志VS名瀬

？阿久根VS志布志。この場合戦いの内容が冬眠と脱皮から別の物に変化します

どちらかを選んでください。会計戦は原作と大きく変えます。種目は同じですが。

今回は本当にすみませんでした！

第十六箱 書記戦前（前書き）

遅れてすみません。アンケート結果は？となりました。

長者原の説明が多くて読みづらいです。

では、どうぞ。

第十六箱 書記戦前

首里side

「それではこれより生徒会戦拳を始めさせていただきますたく存じます」
両手を左右対称に広げ、長者原先輩が宣言する。

「ですがその前に、黒神さま、球磨川さま。少々前に出てきていただいてもよろしいでしょうか？」

「？」

「『？』」

二人が疑問符を浮かべながら長者原先輩の下へ向かい、黒神は右腕に、もう片方は球磨川の左腕に三つの手錠がかけられた。

「『お』・・・』」

「ちよつと待て、これは一体なんの冗談だ？」

自分の行動を振り返ってごらん。すぐわかるよ。

「いえ、あなた方は試合後に見境もなく暴れるなど戦拳遂行に支障を来たしかねない危険行為が目立ちますので、互いに互いを拘束させていただくための措置でございます」

「『・・・やめてあげようよ長者原君』 『僕なんかと繋がれたらめ

「だかちゃんが可哀想だよ」

「・・・一向に構わんわ。貴様の愚行及び愚考を見張るには丁度よい立ち位置だ」

「では、時間も押してまいりましたので、書記戦の試合形式を決めたいと思います。挑戦者である志布志さま、十三枚のカードからお好きな一枚をお選びください」

「……………『巳』のカードがあるけれど、その裏側は庶務戦の時と同じく『毒蛇の巣窟』なのかい？」

「いえいえまさか。庶務戦と書記戦では性格が違いますので『巳』のカードのみならず十三枚のカードの裏側を我々は総とつかえしております」

「一戦ごとにわざわざ十三個ルールと試合場を用意してるんだよね……………金の無駄遣い過ぎ。」

「んー、アタシの勘がこれ選べつつってる気がするから『未』^{ムス}で」

……………へ？未？

「対戦相手が変わったからか？いずれにしてもヤバイ絵にならなくてよかった。」

「このカードをお選びになるとは……………志布志様、同情いたします。書記戦の形式は『狼と羊』に決定いたしました。これは我々が用意した十三の決闘法の中で、もっとも生徒会に有利なルールで行われる選挙でございます」

成る程。どうも過負荷マイナスのくじ運はよろしくないようだ。

* * *

校舎付近まで連れてこられた。

どうでもいいがあの一件以来、過負荷マイナス達は俺を毛嫌いしているらしい。

江迎なんて怯えて近寄ってもくれない。少し悲しいものがある。

「では、ルールを説明させて頂きます」

さて、どんなルールだ？

「簡単にいえば鬼ごっこでございます。阿久根様が逃げる側、志布志様は追う側でございます。阿久根様が三時間逃げ切れれば生徒会側の、その前に志布志様が追いついて阿久根様の腕章を奪えば志布志様の勝利でございます」

「ちよい待ち」

「なんででしょう首里様？」

「このルールだと生徒会側の勝ちが目に見える。特別スペシャルと過負荷マイナスが運動神経で勝負して勝てるか？」

「ええ、おそらく不可能でしょう。ですからハンディマッチとなります。阿久根様にはこれを着て頂かなくてはなりません」

そう言つて長者原先輩が取り出したのは――

「ブツ!？」

「……………くっwww」

「はぁ!？」

「へっ!？」

「『あはははははっ』!」

「……………くっくっ」

――羊の着ぐるみであった。

善吉は吹き出し、俺と蝶ヶ崎は懸命に笑いを堪え、喜界島と江迎は驚きのあまり声も出さず、球磨川は腹を抱えて転げ回っている。

「『ちょwwwwww、長者原君?』 高貴ちゃんこれ着て逃げ回るの?」

「冗談はここまでにしましょう。着ていただくのはこちらでございます」

長者原先輩は着ぐるみをしまつて、代わりに白くてモコモコしたコートを取り出した。

「……冗談かよ!」「……」

「『なんだ』『つまんない』」

球磨川と黒神を除く全員が突っ込んだ。

「心底よかつたー！ーッ!?!」

胸を撫で下ろしながらコートを羽織った阿久根先輩が膝を付いた。

「言い忘れておりましたが、重さは25kgございます」

25kgとか………えげつねえ。

「それからこのインカムを両者お付けください。そして誰か一人、サポーターを指名してください。サポーターの方にはこちらのパソコンとインカムが支給されます」

パソコンには校舎内の監視カメラの映像が写っている。

「蛾々丸頼むわ」

「めだかさん、お願いします」

蝶ヶ崎先輩と黒神がインカムを付け、画面を見る。

「これにて書記戦『狼と羊』の準備は整いました。志布志様は校舎

の一階、阿久根様は二階からのスタートとなります。位置におつき
くださいませ」

―血まみれの書記戦が開幕した。

第十六箱 書記戦前（後書き）

感想を頂けると嬉しいです。

第十七箱 秘密兵器（前書き）

遅れてすみませんでした。

書記戦は後一、二回程で終了したいと思います。オリジナルって思
いのほか大変！

では、ごうげ。

第十七箱 秘密兵器

首里side

「……では、開始です」

長者原先輩の声が響いた。

「……北に向かえ阿久根書記。志布志一年生が階段を駆け上がって来ている」

「『……飛沫ちゃんそっちであってるよ』」高貴ちゃんを追い込んで」

ウチはともかく過負荷マイナスもセオリー通りに動きますか。何を企んでいるのやら……

「長者原先輩、サポーターへのアドバイスはOKですか？」

「良い質問でございます。そちらはプレイヤーとサポーターを除くメンバーと同じ回数、アドバイスが可能となっております。一人の人が纏めてするのか、全員が一度ずつするのかはそれぞれの陣営の自由でございます」

「了解です」

背後を振り返り善吉と喜界島を見る。

「黒神へのアドバイス権、一任してもらっていいか？」

「「いやだ」」

「そうか任せてくれるかって……………え？」

なんでだろ？

「俺だってアドバイスできる。実戦で球磨川の思考パターン認識できたし、役に立つと思うぜ？」

「譲渡して欲しかったらお金払って！」

ああー……………成る程。

善吉はともかく、喜界島ほんいつも通りだな……………

「分かった。善吉に一つ渡す。喜界島さん、いくら？」

「1000円！」

「「いつもより高いけどやっぱり驚きのお値段っ！」」

「権利の譲渡価格は高めに！これ常識ね！」

「分かった。つけといて。これ終わったら払う」

「毎度ありっ！」

ふと画面を見やるとー血塗れで倒れた阿久根先輩が見えた。

「ど、どうした阿久根書記！」

「な、何が起きたんだよ!？」

「え、ええっ!？」

俺の他の三人は見事に動揺してしまっている。

早速アドバイス権を使わなきゃなんないかな。

「落ち着け。単に志布志の過^{マイナス}負荷が発動しただけだー他人の古傷を開くっつー強力極まりない過^{マイナス}負荷がな」

「はあ!？なんだよそのチート！」

「だから落ち着けつての………黒神さん、今からはこれを前提に作戦を組み立てて。あ、精神的外傷や建物の工事の跡なんかも古傷にカウントされるから注意はしといて。まあ、建物は過負荷全開時だけだからそこまで注意する必要はないけど」

「……………了解した」

全く黒神以外全員お通夜みたいな顔しやがって。

「安心しろ。いよいよ追い込まれた時のプランはちゃんとあるーできれば使わずに済むことを願うけどな」

阿久根先輩には、危険極まりない、文字通りの『必殺技』を教える。うまく手加減はできるようにしたが、絶対安全とは言い切れない。

最悪、この書記戦が志布志の死亡で終了する可能性がある。

その他にも渡してあるものはあるが。

(うまく手加減してくれよ……………)

ズタボロになりながらも走る阿久根先輩を見ながら、そんなことを考えていた。

首里 side out

阿久根 side

いたい、痛い、イタイ。

脳は完全に『痛み』に塗りつぶされている。

過負荷^{マイナス}とはいえ女子相手だ、楽勝だろうなんて相手を見くびったのがいけなかったのだろうか。

「ククツ、ざまあねえな阿久根先輩よお。もうギブかあ？」

後ろから志布志の声が聞こえる。詳細は彼女の視界に入った瞬間、全身から血が吹き出した。

これが、過負荷マイナスか、なるほど確かに時計台地下で見た異常アフノーマルなどは比べられないスキルだ。

いや、プラスに働かないという点で見れば、宗像形の殺人衝動も同様なのだろうが、あれとはナニカが決定的に違う。

改善しようとしたか、していないかの違いだろうか。

.....こんな事は後でゆっくり考えればいい。今は志布志をどう振り切るか、そのみを考えよう。

足は内出血で変色している部位も見られる。走れたとしても、それほどスピードは出ない。

しかし、首里君が仕込んでくれたこれがあれば、まだなんとかなる。

協力してくれると言ってくれた時は疑って敵意を向けてしまったというのに、真剣に対策を練ってくれた彼には感謝しなければいけない。

『何か危険な状況に陥り、逃走が可能な状況なら、迷わずこれを使って撤退してください。もしそれでも逃げ切れない最悪の状況になってしまったら、その時は例の技を使ってくださいー手加減は死なない程度でかまいません』

踵の近くに手を伸ばし、心の中でカウントを刻む。 1、2、3、

今だ！

阿久根 side out

首里 side

お、阿久根先輩、例のブーツを使うか。

手を踵にやり、次の瞬間立ち上がって走り出す阿久根先輩。

しかし、ただ走っているわけではない。

まるで、滑るように。

靴底に車輪が付いているかのように

そう、俺が阿久根先輩に渡した……………というか靴に付けたのは、
エア・トレック
A・T。

『エア・ギア』原作において、ストームライダー暴風族を取り締まるマル風Gメンが
使用していた、覆面パトカーならぬ『覆面A・Tエア』と呼ばれる代物だ。

靴を改造させてもらった。ちなみに玉璽レガリアは搭載していない。

スペシャル特別だけあって覚えは早く、基本トリックは一通り抑えている上、
中々機動力もある。単純な『ラン』ならずすでに善吉に匹敵するレベル
だろうな。

これで決着がついてくれるとありがたいんだが…………………………そ
うは問屋がおろすまい。

拭えぬ不安を抱えつつも、ひとまず成り行きを見守ることにした。

第十七箱 秘密兵器（後書き）

阿久根のA・Tの出番はきつとこれで終わりです（マテ

『必殺技』のヒントは、『手足の長さ』です。

感想は随時お待ちしております。

第十八箱 あっけない終わり（前書き）

友達が『彼女とデートだぜWWWWWW』って内容のメールを送って
きやがりました。

畜生、リア充爆発しろ！

ではござい。

第十八箱 あっけない終わり

阿久根 side

「なるほど。そんな物でアタシから逃げ切ろうってか」

後ろから志布志のイラついた声が聞こえてくる。かなりのスピードで走っているというのに、その声はやけにはつきりと耳に届いた。

何故だ。

差はどんどん開いているというのに、何故冷や汗が止まらない!?

『阿久根書記! 志布志一年生の過^{マイナス}負荷は『古傷を開く』というもの

だ！貴様のトラウマも傷として開いてくる！注意しろ！』

え？

次の瞬間、一気に中学時代の記憶が蘇ってきた。

首里 s i d e

現在、阿久根先輩は大変マズイ状況に陥っている。

志布志に中学時代の精神的^{トラウマ}外傷―破壊臣だった時の記憶―を開かれた。

球磨川先輩、黒神の声を聞いてすぐ志布志に指示を出したな。

一応日之影さん、真黒さん、俺でメンタルトレーニングはしてあるが、即席だ。いつまで保つか分からない。

意識が押しつぶされる前にケリをつけてもらうしかないか。

先輩二人にも意見を聞いておこう。

「日之影先輩、真黒さん」

「何だ？」

「どうしたんだい首里君？」

「……………阿久根先輩が今一撃で志布志を仕留める切り札を持っていると言ったら、どうします？」

「俺は早く使わせるべきだと思う」

「右に同じく、だね」

「その結果、志布志が死ぬことになっても、ですか」

二人は一瞬ためらった後、

「それでも、だよ」

「ああ」

決心がついた。

「アドバイスありがとうございます。ー黒神さん」

鬼気迫る表情で黒神がこっちを向いた。

「阿久根先輩に指示をお願いしますー」イーディングワウン「ー喰いを使うように」と

* * *

阿久根 side

『首里同級生から伝言だー』イーディングワウン「ー喰い」とやらを使え、と

.....やはり使うタイミングを指定してもらったことになったか。自分では恐らく使う勇氣は出なかっただろう。やはり僕は駄目な男だ。こんなことではめだかさんの隣に立つなど夢のまた夢だ。

しかし、

せめてこの戦拳は、自分の勝利で飾ってみせる。

倒れた状態から起き上がり、志布志に向かって駆ける。

体をひねり、全身のバネをフル活用する。準備は万端だ。また傷が開いたようだが、気にならない。

この一撃さえ決まれば、勝てるからだ。

A・Tを使って上に跳びー意識を奪う目的で腕を彼女に振り下ろした。

阿久根 side out

首里 side

「な、何だよありゃあ……………何を教えたんだよ、首里……………」

善吉の呆然とした声が響く。

「……………『イーディングワゴン一喰い』ってのは、要するに長い腕を最大限に活用して全身の力を使って放つ、一撃必殺の破壊力を持つ平手打ちだ。やるうと思えばコンクリートだって砕ける」

モニターに目をやる。

そこには床にめり込んだ志布志と、それを見下ろす阿久根先輩の姿があった。

その顔は、心なしか呆然としている。

そして、

「……………腕章を奪われたことにより、書記戦は、志布志飛沫の勝利となります」

長者原先輩の音が、空虚に響いた。

第十八箱 あっけない終わり（後書き）

多少強引ですが、これにて書記戦終了です。

次回から主人公大活躍です。乞うご期待！

第十九箱 人間失格（前書き）

わかる人にはわかるネタが。

第十九箱 人間失格

誰もが、呆然とした。

「……………やられた」

ぼつりと呟く。

志布志の奴、逃げるどころか自分から突っ込んで、腕章を掴んでそのまま喰イディングいを食らってその勢いで制服ごと引きちぎりやがった。

阿久根先輩を傷つけること集中するだろうというもくろみは、見事に外れた。完全に俺の采配ミスだ。

本家と違い、張り倒すのがねらいだった。そこも読み切られた。

チラリと球磨川の方を見ると、向こうもこちらを見ていた。

目があった。

にやあ、と気持ち悪い笑みを浮かべてきた。

「『やあ、残念だったね』

『惜しかったよ。危うく攻略されてしまつところだった』

『でも』

『君は過負荷マインナスに対する認識を誤ったね』

『勝てる勝負を放棄してまで高貴ちゃんを痛めつけ
ると思つた？』

『甘えよ』

『……………が』

『その甘れ』

『嫌いじゃあないぜ』

なにも言い返せない。

完敗だ。畜生。

憔悴した阿久根先輩が戻ってきた。

「すみません阿久根先輩。俺の判断ミスのせいで……………」

「いや……………君のせいじゃないさ。ここまで強力な切り札をいくつももらっておきながら勝てなかった僕が悪い。これじゃめだかさんに申し訳が……………」

ともかくこれで一敗か。原作通りだし構わないんだろうが……………」

『不合格』の喜界島さんを球磨川先輩にぶつけて果たして大丈夫なのだろうか。

答えは否、だろう。

次の戦拳は最悪負けも覚悟か。

この時の予想は、後に最悪の形で裏切られることになる。

* * *

植物園『木漏れ日』前にて。

「それでは、会計戦を始めさせていただきたく存じます」

結局何の対策も練れなかった……………

「では、今回の会計戦に出場されるのは喜界島様と江迎様でよろしいですね？」

「はい」

「はい」

「それでは、今回の会計戦ですが各陣営からも二名ずつサブプレイヤーを選出していただくこととなります」

サブプレイヤーの人数が増えたか。まあ大体予想通り。

「サブプレイヤー？なにそれ誰でも構わないの？」

「はい。既に試合を終えた候補者でも構いません」

「『んー』『じゃーまー僕が出るよ』『一応リーダーだし仕方ないよ』」

「アタシも出るぞ。つかアタシしかないし」

「……………誰でも出ていいって言われてもな……………。こっちは俺が出るしかねーだろうが……………」

向こうは志布志、球磨川か……………これマズイってレベルじゃないな。

「……………もう一人は俺が出ます」

多少迷ったが結局立候補することにした。副会長戦に出るつもりだったんだが、日之影先輩に任せておけば大丈夫のはず。

「さて、参加なさるサブプレイヤーの方々にはこのブレスレットを装着いただきます」

げえっ、俺たちもいばら姫スリーピングビューティ付けなきゃいけないのかよ……………ん？

二つの腕輪の色が違う。片方は普通に緑でもう片方は毒々しい赤だ。

「えらく模様がこってるね。これは？」

「端的に言えば爆弾でございます」

「……」

「『……………』」

「時限爆弾内臓式のブレスレット……………作動させてから

ちょうど一時間後に爆発する仕組みになっております」

「爆弾つて……………冗談でしょ？そんなの腕が吹っ飛ぶくらいじゃ済まないよ!？」

古賀さんが驚愕の声を上げる。普通に考えたら死ぬだろうな。間違いない。

「ええ。ですから急いで外してさしあげないといけませんね。それがこの会計戦のテーマでございます。江迎様には人吉様、首里様のブレスレット、喜界島様には球磨川様、志布志様の腕輪の鍵をお渡しします。どのような手段を用いても構いません。相手の持つ鍵を奪い、仲間の腕輪を外してください。先に仲間を救った方の勝利となります。ありがとうございます」

「持つ鍵、または奪った鍵は肌身離さずよく見えるようにお持ちください。捨てたり隠したりするのはルール違反と致します。もちろん鍵の破壊も反則となりますので、特に江迎様はその点お気をつけください」

流石『公平』の異常アブノーマルを持つていただけのことはある。審判とか天職じゃなかるうか。

「即ち、この会計戦において留意すべき点は以下の四つ。『1、制限時間内に 2、鍵を守りながら 3、鍵を奪い 4、パートナーを助ける』。ただそれだけの実にシンプルな競技でございます」

「質問です。腕輪の色の違いには何の意味が？」

「威力の違いでございます。赤く緑となっております。ただし赤を

お選びになったサブプレイヤーは、特典として会計より直接鍵を奪うことが可能となります」

へえ……………結構面白いルール作ってきたじゃん。

「俺が赤でいいか？道人」

「ん。分かった」

善吉が赤、俺が緑を着ける。

「待たんか長者原二年生、いい加減にしろ！それでは絶対に片方のパートナーが爆死するではないか！勝ち負け以前の問題だ！確実に死人が出るようなゲームに参加できるか！！」

「ご安心ください黒神様。片方のチームの爆弾が解除された時点で会計戦は終了。もう片方のチームの爆弾の时限装置も連動して同時に停止されます。爆弾が爆発するのはあくまで一時間後、タイムアップの場合のみでございます」

つまり、勝ち負けを度外視し、パートナーの命を優先すればこの会計戦は早く終了する。

……………原作の球磨川は別の方向に勝ち負けを度外視して引き分けを狙ったわけだけど

「……………それでも同じことだ！いやむしろ死人が二人になる分悪質といえる！！球磨川！流石の貴様だつてこのようなルールを受け入れられるわけが……………！！」

「『何を言ってるんだめだかちゃん』 我俣を言つて長者原君を困

らせちやダメじゃないか』 『気持ちはいたいほどわかるけどそこは人として!』 『決められたルールは守ろうよ、ね?』 「

..... 古語の『あさましき』って言葉がこうもぴったり似合う人間を俺は他に知らない。

「 全く、死人が出ると聞いた途端やる気を出さなくて。 マイナス過負荷マイナスってそこまで最低な人種だったんですか?」

「 『いやあ、君は マイナス過負荷を褒めるのが上手だね』 『女の子だったら口説いてるところだよ』 「

「他の二人ならまだしもアンタに言われても嬉しくありませんよ。気持ち悪いだけです」

「まあ良いです。この会計戦で、とりあえずアンタらは殺して解して並べて揃えて晒して刻んで炒めて千切って潰して引き伸して刺して抉って剥がして断じて刳り貫いて壊して歪めて縊って曲げて転がして沈めて縛って喰らってやるので楽しみにしてくださいね?」

「 『 』 『それだけ自分も マイナス過負荷なくせに』 『カマトトぶるのはよくないよ』 「

「嫌だな、少なくとも俺はあんたみたく性根が螺子曲がってるわけじゃないですよ」

皆一（球磨川先輩以外）が一斉に引いた。具体的には俺の三つ目のセリフあたりで。

「 そろそろよろしいですか、お二方」

「ああ、すみません」

「では、決闘を始めさせていただきます」

「……………会計戦、開幕。」

第十九箱 人間失格（後書き）

お目汚し失礼しました。繋ぎはこの回で終了。次回から本格的に戦闘です。もしかするとフラグを建てるかも……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6955x/>

箱庭の調律者

2011年12月29日15時47分発行